

## PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 09-194833

(43)Date of publication of application : 29.07.1997

(51)Int.Cl.

C09K 11/59

C09K 11/66

(21)Application number : 08-008630

(71)Applicant : KASEI OPTONIX CO LTD

(22)Date of filing : 22.01.1996

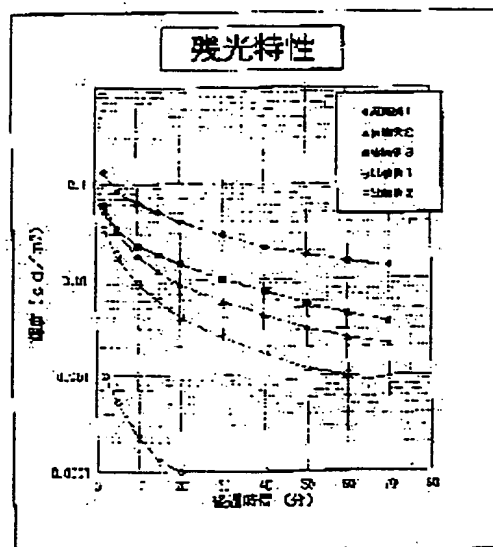
(72)Inventor : HASE TAKASHI  
KODERA NOBORU  
HAYAKAWA MORIO  
MIURA NORIO  
SAKAMOTO HITOSHI

## (54) PHOTOSTIMULABLE PHOSPHOR

## (57)Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To provide a photostimulable phosphor having afterglow far longer than that of commercial yellowish-green ZnS:Cu photostimulable phosphors, blue to green luminescence and afterglow, and chemical stability and excellent weather resistance.

SOLUTION: This phosphor is represented by the formula:  $m(\text{Sr}_{1-a}\text{M1}_a)\text{O} \cdot n(\text{Mg}_{1-b}\text{M2}_b)\text{O} \cdot 0.2(\text{Si}_{1-c}\text{Gec})\text{O}_2$ :EuxLn<sub>y</sub> (wherein M1 is Ca or Ba; M2 is Be, Zn or Cd; Ln is Sc, Y, La, Ce, Pr, Nd, Sm, Gd, Tb, Dy, Ho, Er, Tm, Yb, Lu, B, Al, Ga, In, Tl, Sb, Bi, As, P, Sn, Pb, Ti, Zr, Hf, V, Nb, Ta, Mo, W, Cr or Mn, and a, b, c, m, n, x and y are in the following ranges:  $0 \leq a \leq 0.8$ ,  $0 \leq b \leq 0.2$ ,  $0 \leq c \leq 0.2$ ,  $1.5 \leq m \leq 2.5$ ,  $0.5 \leq n \leq 1.5$ ,  $1 \times 10^{-5} \leq x \leq 1 \times 10^{-1}$ , and  $1 \times 10^{-5} \leq y \leq 1 \times 10^{-1}$ ) and further contains halogen atoms (F, Cl, Br or I) in an amount in the range of  $1 \times 10^{-5}$  to  $1 \times 10^{-1}$  g.atom/mol of the matrix.



## LEGAL STATUS

[Date of request for examination] 07.07.1999

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number] 3257942

[Date of registration] 07.12.2001

[Number of appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's  
decision of rejection]

[Date of extinction of right]

Copyright (C); 1998,2003 Japan Patent Office

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平9-194833

(43) 公開日 平成9年(1997)7月29日

(51) Int.Cl. <sup>6</sup>	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
C 0 9 K 11/59	C P R	9636-4H	C 0 9 K 11/59	C P R
11/66	C P T	9636-4H	11/66	C P T

審査請求 未請求 請求項の数 3 O L (全 8 頁)

(21) 出願番号 特願平8-8630

(22) 出願日 平成8年(1996)1月22日

(71) 出願人 390019976

化成オプトニクス株式会社

東京都港区芝公園一丁目8番12号

(72) 発明者 長谷 勲

神奈川県小田原市成田1060番地 化成オプトニクス株式会社内

(72) 発明者 小寺 昇

神奈川県小田原市成田1060番地 化成オプトニクス株式会社内

(72) 発明者 早川 守男

神奈川県小田原市成田1060番地 化成オプトニクス株式会社内

(74) 代理人 弁理士 内田 明 (外2名)

最終頁に続く

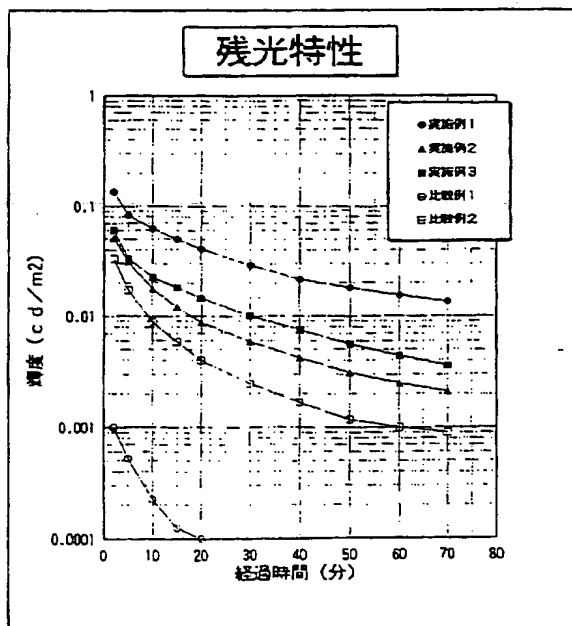
(54) 【発明の名称】 蓄光性蛍光体

(57) 【要約】

【課題】 市販の  $ZnS:Cu$  黄緑色蓄光性発光蛍光体に比べても、はるかに長い残光特性を有し、青色から緑色発光及び残光特性を有し、化学的に安定で耐候性に優れた蓄光性蛍光体を提供しようとするものである。

【解決手段】  $m(Sr_{1-a}M^1_a)O \cdot n(Mg_{1-b}M^2_b)O \cdot 2(Si_{1-c}Ge_c)O_2 \cdot Eu_xLn_y$  で表され、式中  $M^1$  は  $Ca, Ba$ 、 $M^2$  は  $Be, Zn, Cd, Ln$  は  $Sc, Y, La, Ce, Pr, Nd, Sm, Gd, Tb, Dy, Ho, Er, Tm, Yb, Lu, B, Al, Ga, In, Tl, Sb, Bi, As, P, Sn, Pb, Ti, Zr, Hf, V, Nb, Ta, Mo, W, Cr, Mn$  を示し、式中  $a, b, c, m, n, x, y$  は下記の範囲にあり、かつ、 $F, Cl, Br, I$  等のハロゲン元素を  $1 \times 10^{-5} \sim 1 \times 10^{-1} g \cdot atm / 母体 1 モル$  の範囲で含有する蓄光性蛍光体である。

$0 \leq a \leq 0.8$ 、 $0 \leq b \leq 0.2$ 、 $0 \leq c \leq 0.2$ 、 $1.5 \leq m \leq 2.5$ 、 $0.5 \leq n \leq 1.5$ 、 $1 \times 10^{-5} \leq x \leq 1 \times 10^{-1}$ 、 $1 \times 10^{-5} \leq y \leq 1 \times 10^{-1}$



## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 Eu付活珪酸塩蓄光性蛍光体において、組成式  $m(\text{Sr}_{1-a}\text{M}^1_a)\text{O} \cdot n(\text{Mg}_{1-b}\text{M}^2_b)\text{O} \cdot 2(\text{Si}_{1-c}\text{Ge}_c)\text{O}_2 : \text{Eu}_x\text{Ln}_y$  で表され、式中  $\text{M}^1$  はCa及びBaから選択された一種以上の元素、 $\text{M}^2$  はBe、Zn及びCdから選択された一種以上の元素、共付活剤LnはSc、Y、La、Ce、Pr、Nd、Sm、Gd、Tb、Dy、Ho、Er、Tm、Yb、Lu、B、Al、Ga、In、Tl、Sb、Bi、As、P、Sn、Pb、Ti、Zr、Hf、V、Nb、Ta、Mo、W、Cr及びMnから選択された一種以上の元素を示し、式中a、b、c、m、n、x及びyは下記の範囲にあり、かつ、前記蛍光体はF、Cl、Br及びIから選択された一種以上のハロゲン元素を、 $1 \times 10^{-5} \sim 1 \times 10^{-1} \text{ g} \cdot \text{atm} / \text{母体1モルの範囲}$  で含有することを特徴とする蓄光性蛍光体。

$$0 \leq a \leq 0.8$$

$$0 \leq b \leq 0.2$$

$$0 \leq c \leq 0.2$$

$$1.5 \leq m \leq 2.5$$

$$0.5 \leq n \leq 1.5$$

$$1 \times 10^{-5} \leq x \leq 1 \times 10^{-1}$$

$$1 \times 10^{-5} \leq y \leq 1 \times 10^{-1}$$

【請求項2】 前記共付活剤LnがDy、Nd、Tm、Sn、In及びBiから選択された一種以上の元素であることを特徴とする請求項1記載の蓄光性蛍光体

【請求項3】  $140 \sim 450 \text{ nm}$ の範囲の紫外線及び／又は可視光による励起後加熱昇温するときに、少なくとも室温以上において熱発光を呈することを特徴とする請求項1又は2記載の蓄光性蛍光体

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【産業上の利用分野】本発明は、屋内や屋外、さらに水中などの暗所における表示や、光源として利用することができ、耐候性に優れ、長残光性を有し、紫外線及び／又は可視光線の励起によって青色から緑色発光を呈するユーロピウム主付活の珪酸塩系の蓄光性蛍光体に関する。

## 【0002】

【従来の技術】蓄光性蛍光体は、蛍光体に何らかの励起を与えて発光させた後、励起を停止した後も発光を継続する蛍光体である。ところで、蓄光性蛍光体は、表示の多様化、高機能化に伴い、蓄光性蛍光体の多色化、長残光化及び耐候性改良が求められている。従来の蓄光性蛍光体は、発光・残光の色の種類が限定され、かつ、耐候性が悪く、残光時間が短いものであった。

【0003】ところで、青色発光蓄光性蛍光体としては、 $(\text{Ca}, \text{Sr})\text{S}:\text{Bi}$  蛍光体、黄緑色発光蓄光性蛍光体としては、 $\text{ZnS}:\text{Cu}$  蛍光体、また、赤色発光蓄光性蛍光体としては $(\text{Zn}, \text{Cd})\text{S}:\text{Cu}$  蛍光体が

知られている。

【0004】しかし、上記 $(\text{Ca}, \text{Sr})\text{S}:\text{Bi}$  蛍光体は、母体の化学安定性が極めて悪く、また、輝度及び残光特性も十分でないため、現在ではほとんど使用されていない。また、 $(\text{Zn}, \text{Cd})\text{S}:\text{Cu}$  蛍光体は、毒性物質であるCdが母体の半分ほど占めており、輝度及び残光特性も満足できないため、現在ではほとんど使用されていない。 $\text{ZnS}:\text{Cu}$ も湿気の下で紫外線により分解し、黒化しやすく、残光特性も不満であるが、安価なこともあり、時計の文字盤や避難誘導標識等屋内用に多用されている。

## 【0005】

【発明が解決しようとする課題】本発明は、上記の欠点を解消し、長残光特性を有し、青色から緑色発光を有し、さらに化学的に安定で耐候性に優れた蓄光性蛍光体を提供しようとするものである。

## 【0006】

【課題を解決するための手段】即ち、本発明は、下記の構成からなる青色から緑色発光蓄光性蛍光体である。

(1) Eu付活珪酸塩蓄光性蛍光体において、組成式  $m(\text{Sr}_{1-a}\text{M}^1_a)\text{O} \cdot n(\text{Mg}_{1-b}\text{M}^2_b)\text{O} \cdot 2(\text{Si}_{1-c}\text{Ge}_c)\text{O}_2 : \text{Eu}_x\text{Ln}_y$  で表され、式中、 $\text{M}^1$  はCa及びBaから選択された一種以上の元素、 $\text{M}^2$  はBe、Zn及びCdから選択された一種以上の元素、共付活剤LnはSc、Y、La、Ce、Pr、Nd、Sm、Gd、Tb、Dy、Ho、Er、Tm、Yb、Lu、B、Al、Ga、In、Tl、Sb、Bi、As、P、Sn、Pb、Ti、Zr、Hf、V、Nb、Ta、Mo、W、Cr及びMnから選択された一種以上の元素を示し、式中a、b、c、m、n、x及びyは下記の範囲にあり、かつ、前記蛍光体はF、Cl、Br及びIから選択された一種以上のハロゲン元素を $1 \times 10^{-5} \sim 1 \times 10^{-1} \text{ g} \cdot \text{atm} / \text{母体1モルの範囲}$  で含有することを特徴とする蓄光性蛍光体。

$$0 \leq a \leq 0.8$$

$$0 \leq b \leq 0.2$$

$$0 \leq c \leq 0.2$$

$$1.5 \leq m \leq 2.5$$

$$0.5 \leq n \leq 1.5$$

$$1 \times 10^{-5} \leq x \leq 1 \times 10^{-1}$$

$$1 \times 10^{-5} \leq y \leq 1 \times 10^{-1}$$

【0007】(2) 前記共付活剤Lnが、Dy、Nd、Tm、Sn、In及びBiから選択された一種以上の元素であることを特徴とする上記(1)記載の蓄光性蛍光体

【0008】(3)  $140 \sim 450 \text{ nm}$ の範囲の紫外線及び／又は可視光による励起後加熱昇温するときに、少なくとも室温以上において熱発光を呈することを特徴とする上記(1)又は(2)記載の蓄光性蛍光体

## 【0009】

【発明の実施の態様】本発明者等は、 $(\text{Sr}, \text{M}^1)\text{O}$

—(Mg, M<sup>2</sup>)O—(Si, Ge)O<sub>2</sub>系の蛍光体母体(M<sup>1</sup>=Ca, Sr, Baで、M<sup>2</sup>=Be, Zn, Cdである)を中心に検討を進めたところ、図1に斜線で示す領域の組成域に、長残光化に適した蛍光体母体が存在することを見出した。即ち、組成式m(Sr, M<sup>1</sup>)O·n(Mg, M<sup>2</sup>)O·2(Si, Ge)O<sub>2</sub>で表され、m, nが、1.5≤m≤2.5で、0.5≤n≤1.5の範囲が適している。

【0010】そして、本発明では、上記の蛍光体母体に対してEuで付活すると共に、Ln(Sc, Y, La, Ce, Pr, Nd, Sm, Gd, Tb, Dy, Ho, Er, Tm, Yb, Lu, B, Al, Ga, In, Tl, Sb, Bi, As, P, Sn, Pb, Ti, Zr, Hf, V, Nb, Ta, Mo, W, Cr及びMnから選択された一種以上の元素)で共付活させ、かつ、ハロゲン元素(F, Cl, Br及びIから選択された一種以上の元素)を含有させることにより、発光センター(Eu)や含有元素の最適化に成功し、極めて長い残光特性を有し、化学的に安定で耐候性に優れた青色から緑色発光の蓄光性蛍光体を得ることに成功した。上記の共付活剤Lnの中でも、Dy, Nd, Tm, Sn, In及びBiが特に優れている。

【0011】本発明の組成式において、Srの置換量a(モル)は0≤a≤0.8、好ましくは0≤a≤0.4の範囲が適しており、0.8を越えて置換すると残光特性向上の効果が少なくなる。また、Znの置換量b(モル)は0≤b≤0.2、好ましくは0≤b≤0.1の範囲が適しており、0.2を越えて置換すると残光特性向上の効果が少なくなる。SiをGeに置換する量c(モル)は0≤c≤0.2、好ましくは0≤c≤0.1の範囲が適しており、0.2を越えると残光特性向上の効果が少なく、輝度も低下する。

【0012】また、蛍光体の母体構成成分であるm(Sr, M<sup>1</sup>)O、n(Mg, M<sup>2</sup>)O及び2(Si, Ge)O<sub>2</sub>の組成比を決める前記m, nの値は1.5≤m≤2.5及び0.5≤n≤1.5、好ましくは1.7≤m≤2.3及び0.7≤n≤1.3の範囲が適しており、この範囲を外れると、目的以外の化合物ができたり、原料酸化物が残存するため、輝度が低下する。

【0013】付活剤のEuの配合量x(g·atm)は、1×10<sup>-5</sup>≤x≤1×10<sup>-1</sup>、好ましくは1×10<sup>-4</sup>≤x≤5×10<sup>-2</sup>の範囲が適しており、1×10<sup>-5</sup>未満では発光センターが少なくなり、目的の輝度が得られない。また、1×10<sup>-1</sup>を越えると濃度消光を起こし、輝度が低下すると共に残光特性も低下する。

【0014】共付活剤元素Lnの配合量y(g·atm)は、1×10<sup>-5</sup>≤y≤1×10<sup>-1</sup>、好ましくは1×10<sup>-4</sup>≤y≤5×10<sup>-2</sup>の範囲が適しており、1×10<sup>-5</sup>未満では残光特性に効果が無く、1×10<sup>-1</sup>を越えると共付活剤元素により発光するため、青色から緑色の領

域の発光を得ることができない。

【0015】本発明の蛍光体に添加するハロゲン元素は、一部融剤として結晶成長と発光センター及び共付活剤元素Lnの拡散に働き、輝度及び残光特性を向上させる。ハロゲン元素の添加量z(g·atm)は、洗浄処理等後の分析値としての値で1×10<sup>-5</sup>≤z≤1×10<sup>-1</sup>、好ましくは1×10<sup>-4</sup>≤z≤1×10<sup>-2</sup>が適している。1×10<sup>-1</sup>を越えると、蛍光体が焼結して粉体への処理が困難となり、1×10<sup>-5</sup>を下回ると、瞬時発光輝度及び残光低下等の不都合が生ずる。

【0016】そして、本発明の蓄光性蛍光体は、140～450nmの範囲の紫外線及び／又は可視光による励起後に、該蛍光体を加熱し昇温するときに、室温以上において熱発光を呈する。

【0017】本発明の蓄光性蛍光体は、次のようにして合成される。蛍光体原料は、母体元素Sr, M<sup>1</sup>(M<sup>1</sup>=Ca, Ba), Mg, M<sup>2</sup>(M<sup>2</sup>=Be, Zn, Cd), Si, Geと、付活剤Eu及び共付活剤Lnは各々酸化物もしくは焼成により容易に酸化物となりうる炭酸塩、硝酸塩、塩化物などの塩の形で用いる。また、ハロゲン元素はアンモニウム塩、アルカリ金属塩又は上記構成元素(母体構成元素、付活剤元素Eu、共付活剤元素Ln)のハロゲン化合物の形で用いる。そして、上記組成式の組成範囲になるように採取し、湿式又は乾式で充分に混合する。なお、希土類原料同志は共沈で混合させてもよい。

【0018】この混合物をアルミナルツボ等の耐熱容器に充填し、水素含有中性ガスの還元雰囲気中又は炭素還元雰囲気中で800～1400℃で1～12時間で1回以上焼成する。なお、複数焼成を行うときにも、最終焼成工程は必ず還元雰囲気中で行う。この焼成物を粉碎し、弱鉍酸洗、水洗、乾燥、篩分等を行い、本発明の蓄光性蛍光体を得る。

【0019】図2は、実施例1で合成された蓄光性蛍光体Sr<sub>1.995</sub>MgSi<sub>2</sub>O<sub>7</sub>:Eu<sub>0.005</sub>Dy<sub>0.025</sub>Cl<sub>0.025</sub>の結晶構造を確認したX線回折図である。この蛍光体組成のうち、Sr, Mg, Siの一部を請求項に記載の範囲で他の元素に置換してもほぼ同様の結果を示した。

【0020】図3は、実施例1の蓄光性蛍光体(曲線a)、実施例2で合成された蓄光性蛍光体Sr<sub>1.195</sub>Ca<sub>0.8</sub>MgSi<sub>2</sub>O<sub>7</sub>:Eu<sub>0.005</sub>Dy<sub>0.025</sub>Br<sub>0.025</sub>(曲線b)、実施例3で合成された蓄光性蛍光体Sr<sub>0.995</sub>Ba<sub>1.0</sub>MgSi<sub>2</sub>O<sub>7</sub>:Eu<sub>0.005</sub>Dy<sub>0.025</sub>Br<sub>0.025</sub>(曲線c)に対し、365nm紫外線で励起したときの発光スペクトルを示したもので、それぞれの発光ピーク波長が470nm、500nm、450nmであった。これらの蛍光体組成の一部を請求項に記載の範囲で他の元素で置換してもほぼ同様の結果を示した。

【0021】図4は、実施例1の蓄光性蛍光体を用いて、励起スペクトルの領域を測定して示したものである。励起スペクトルの領域の測定は、分光光度計の出力側の分光波長を470nmに固定し、試料に照射する光の励起波長を変化させた時の470nm（出力光）の強度をプロットしたもので、縦軸は470nmの相対発光強度、横軸はスキャンする励起光の波長を意味する。この蛍光体組成の一部を請求項に記載の範囲で他の元素で置換してもほぼ同様の結果を示した。

【0022】図5は、実施例1の蓄光性蛍光体（発光スペクトルピーク波長470nm）、実施例2の蓄光性蛍光体（発光スペクトルピーク波長500nm）、実施例3の蓄光性蛍光体（発光スペクトルピーク波長450nm）、比較例1の蓄光性蛍光体（ $\text{Sr}_{1.995}\text{MgSi}_2\text{O}_7 : \text{Eu}_{0.005}$ 、発光スペクトルピーク波長470nm）及び、比較例2の蓄光性蛍光体（ $\text{ZnS} : \text{Cu}$ 、発光スペクトルピーク波長516nm）に対し、昼光色蛍光ランプを用いて300ルクスで30分間照射し、照射停止2分後の残光特性を測定した。測定方法は、上記の記載のように、30Wの昼光色蛍光ランプを試料に照射し、ランプを切った後の蛍光体の残光を視感度フィルター付き輝度計で残光の輝度を測定した。

【0023】図5から明らかなように、発光スペクトルピーク波長470nmの蓄光性蛍光体である実施例1は、比較例1に対して極めて顕著な残光特性を有することが分かる。また、実施例2、3の蓄光性蛍光体も、発光色は異なるが、市販品に相当する比較例2の $\text{ZnS} : \text{Cu}$ 黄緑色発光蛍光体と対比しても優れた残光特性を有していることが分かる。

【0024】図6は、実施例1～3の蓄光性蛍光体に対し、昼光色蛍光ランプ300ルクス15秒照射、照射停止1分後の熱発光特性（グローカーブ）を化成オプトニクス社製、TLDリーダー（KYOKKO TLD-1300改良タイプ）を用いて約8～10℃/秒の昇温速度で測定し、その結果を示したグラフである。図6の曲線a～cから明らかなように、実施例1～3の蓄光性蛍光体は、室温以上の温度域で上記の昇温速度で昇温すると、相対熱発光強度が増加していることが分かる。

【0025】本発明の蓄光性蛍光体は、上記のように極めて高輝度長残光性を示し、耐侯性に優れかつ化学的に安定なため、従来の $\text{ZnS}$ 系の蓄光性蛍光体に比べても、屋内のみならず屋外用など広い用途への利用を可能にする。例えば、種々の物品の表面に塗布したり、プラスチック、ゴム、塩化ビニール、合成樹脂又はガラス等に混合し、成型体もしくは蛍光膜として、道路標識、視認表示、装飾品、レジャー用品、時計、OA機器、教育機器、安全標識及び建築材等に利用することができる。

【0026】

【実施例】

【実施例1】

$\text{SrCO}_3$	29.5 g
$\text{MgO}$	4.0 g
$\text{SiO}_2$	12.0 g
$\text{Eu}_2\text{O}_3$	0.09 g
$\text{Dy}_2\text{O}_3$	0.47 g
$\text{NH}_4\text{Cl}$	2.3 g

上記の原料を十分に混合し、アルミナルツボに詰めて電気炉を用い、窒素98%水素2%の還元雰囲気中で1150℃で2時間焼成した。得られた焼成物を粉碎、水洗、乾燥、篩分を行って蓄光性蛍光体を得た。

【0027】この蛍光体は、 $\text{Sr}_{1.995}\text{MgSi}_2\text{O}_7 : \text{Eu}_{0.005}, \text{Dy}_{0.025}, \text{Cl}_{0.025}$ の組成を有し、図2のX線回折図を示し、365nm紫外線で励起したときの発光スペクトルは図3（曲線a）のとおりで、その発光ピーク波長は470nmの青色発光蓄光性を有するものであった。また、励起スペクトルは、図4のように可視域まで広がっていた。残光特性は、図5（曲線a）示すように長残光を示した。また、グローカーブは図6のとおりであった。さらに、蛍光体の発光ピーク波長、残光特性（照射停止2分後と60分後の発光強度を、 $\text{ZnS} : \text{Cu}$ 黄緑色発光蓄光蛍光体を100%にした発光強度比）及びグローカーブのピーク温度値を表1、及び表2に記載した。

【0028】【実施例2】

$\text{SrCO}_3$	17.6 g
$\text{CaCO}_3$	8.0 g
$\text{MgO}$	4.0 g
$\text{SiO}_2$	12.0 g
$\text{Eu}_2\text{O}_3$	0.09 g
$\text{Dy}_2\text{O}_3$	0.47 g
$\text{NH}_4\text{Br}$	3.3 g

上記の原料を十分に混合し、アルミナルツボに詰めて電気炉を用い、炭素還元雰囲気中で1200℃で2時間焼成した。得られた焼成物を粉碎、水洗、乾燥、篩分を行って蓄光性蛍光体を得た。

【0029】この蛍光体は、 $\text{Sr}_{1.195}\text{Ca}_{0.8}\text{MgSi}_2\text{O}_7 : \text{Eu}_{0.005}, \text{Dy}_{0.025}, \text{Br}_{0.025}$ の組成を有し、365nm紫外線で励起したときの発光スペクトルは図3（曲線b）のとおりで、そのピークは500nmの緑色発光蓄光性を有するものであった。また、残光特性は、図5（曲線b）示すように長残光を示した。また、グローカーブは図6（曲線b）のとおりであった。さらに、蛍光体の発光ピーク波長、残光特性（照射停止2分後と60分後の発光強度を、 $\text{ZnS} : \text{Cu}$ 黄緑色発光蓄光蛍光体を100%にした発光強度比）及びグローピーク温度値を表1、及び表2に記載した。

【0030】【実施例3】

$\text{SrCO}_3$	14.7 g
$\text{BaCO}_3$	19.7 g

MgO	4.0 g
SiO <sub>2</sub>	12.0 g
Eu <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.09 g
Dy <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.47 g
NH <sub>4</sub> Br	2.68 g

上記の原料を十分に混合し、アルミナルツボに詰めて電気炉を用い、窒素97%水素3%還元雰囲気中で1200℃で3間焼成した。得られた焼成物を粉碎、水洗、乾燥、篩分を行って蓄光性蛍光体を得た。

【0031】この蛍光体は、 $Sr_{0.995}Ba_{1.0}MgSi_2O_7:Eu_{0.005}Dy_{0.025}Br_{0.025}$ の組成を有し、365nm紫外線で励起したときの発光スペクトルは図3(曲線c)のとおりで、そのピークは500nmの青緑色発光蓄光性を有するものであった。また、残光特性は、図5(曲線c)示すように長残光を示した。また、グローカーブは図6(曲線c)のとおりであった。さらに、蛍光体の発光ピーク値、残光特性(照射停止2分後と60分後の発光強度を、ZnS:Cu黄緑色蓄光性蛍光体を100%にした発光強度比)及びグローカーブのピーク温度値を表1及び、表2に記載した。

【0032】〔実施例4～19〕実施例1と同様の方法で表1に記載の組成を有する実施例4～19の蓄光性蛍光体を得た。実施例4～19の蛍光体の発光ピーク値、残光特性(照射停止2分後と60分後の発光強度を、ZnS:Cu黄緑色蓄光性蛍光体を100%にした発光強度比)及びグローピーク温度値を表1、及び表2に記載した。

【0033】〔比較例1～2〕共付活剤元素Ln及びハロゲン元素の配合を省略した以外は、実施例1と同様に比較例1の $Sr_{1.995}MgSi_2O_7:Eu_{0.005}$ 蓄光性蛍光体を得た。また、比較例2は化成オプトニクス社製のZnS:Cu黄緑色蓄光性蛍光体(LC-G1)を参照試料とした。これらの蛍光体の発光ピーク波長、残光特性(照射停止2分後と60分後の発光強度をZnS:Cu黄緑色蓄光性蛍光体を100%にした発光強度比)及びグローカーブのピーク値を表1、及び表2に記載した。

【0034】

【表1】

	化学組成式	発光ピーク (nm)	残光特性(%)		グローピーク (℃)
			5分後	60分後	
実1	$Sr_{1.995}MgSi_2O_7:Eu_{0.005}Dy_{0.025}Cl_{0.025}$	470	480	1540	90
実2	$Sr_{1.995}Ca_{0.005}MgSi_2O_7:Eu_{0.005}Dy_{0.025}Br_{0.025}$	500	180	250	70
実3	$Sr_{0.995}Ba_{1.0}MgSi_2O_7:Eu_{0.005}Dy_{0.025}Br_{0.025}$	450	195	440	100
実4	$Sr_{1.995}MgSi_2O_7:Eu_{0.005}Dy_{0.025}$	470	60	180	85
実5	$Sr_{1.995}MgSi_2O_7:Eu_{0.005}Dy_{0.025}Cl_{0.025}$	470	870	2530	95
実6	$Sr_{1.995}MgSi_2O_7:Eu_{0.005}Dy_{0.025}Br_{0.025}$	470	705	1830	95
実7	$Sr_{1.995}MgSi_2O_7:Eu_{0.005}Dy_{0.025}Fe_{0.01}$	470	195	280	80
実8	$Sr_{1.995}MgSi_2O_7:Eu_{0.005}Dy_{0.025}Cl_{0.025}$	470	450	990	90
実9	$Sr_{1.995}MgSi_2O_7:Eu_{0.005}Dy_{0.025}Cl_{0.025}$	470	330	710	80
実10	$Sr_{1.995}MgSi_2O_7:Eu_{0.005}Nd_{0.025}Br_{0.025}$	470	75	210	70

【0035】

【表2】

	化 学 組 成 式	発光ピーク (nm)	残光特性(%) 5分後	60分後	発光ピーク (°C)
実11	$\text{Sr}_{1.995}\text{MgSi}_2\text{O}_7:\text{Eu}_{0.005}\text{Ti}_{0.025}\text{Br}_{0.025}$	470	70	200	80
実12	$\text{Sr}_{1.995}\text{MgSi}_2\text{O}_7:\text{Eu}_{0.005}\text{In}_{0.025}\text{Br}_{0.025}$	470	45	120	75
実13	$\text{Sr}_{1.995}\text{MgSi}_2\text{O}_7:\text{Eu}_{0.005}\text{Bi}_{0.025}\text{Br}_{0.025}$	470	40	110	70
実14	$\text{Sr}_{1.995}\text{MgSi}_2\text{O}_7:\text{Eu}_{0.005}\text{Sn}_{0.025}\text{Br}_{0.025}$	470	45	110	80
実15	$\text{Sr}_{0.995}\text{Ba}_{1.005}\text{MgSi}_2\text{O}_7:\text{Eu}_{0.005}\text{Dy}_{0.025}\text{Br}_{0.025}$	470	45	230	90
実16	$\text{Sr}_{1.995}\text{Mg}_{0.9}\text{Zn}_{0.1}\text{Si}_2\text{O}_7:\text{Eu}_{0.005}\text{Dy}_{0.025}\text{Cl}_{0.025}$	470	525	1330	80
実17	$\text{Sr}_{1.995}\text{MgSi}_{1.9}\text{Ge}_{0.1}\text{O}_7:\text{Eu}_{0.005}\text{Dy}_{0.025}\text{Cl}_{0.025}$	470	330	1200	80
実18	$\text{Sr}_{1.995}\text{Mg}_{0.9}\text{Cd}_{0.1}\text{Si}_2\text{O}_7:\text{Eu}_{0.005}\text{Dy}_{0.025}\text{Cl}_{0.025}$	470	420	920	75
実19	$\text{Sr}_{1.995}\text{Mg}_{0.9}\text{Be}_{0.1}\text{Si}_2\text{O}_7:\text{Eu}_{0.005}\text{Dy}_{0.025}\text{Cl}_{0.025}$	470	395	900	80
比1	$\text{Sr}_{1.995}\text{MgSi}_2\text{O}_7:\text{Eu}_{0.005}$	470	3	0	80
比2	$\text{ZnS}:\text{Cu}$	516	100	100	120

## 【0036】

【発明の効果】本発明は、上記の構成を採用することにより、化学的に安定で、市販のZnS系黄緑色発光蓄光蛍光体と比較しても、高輝度ではなかに長い残光を示す、青色～緑色蓄光性蛍光体を初めて提供可能とし、表示の多色化多機能化に大きく寄与するものである。

## 【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の蓄光性蛍光体の母体をなす $(\text{Sr}, \text{M}^1)\text{O}-(\text{Mg}, \text{M}^2)\text{O}-(\text{Si}, \text{Ge})_2\text{O}$ 系酸化物の三元状態図を示したグラフである。

【図2】実施例1で合成した蓄光性蛍光体の結晶構造を

確認したX線回折図である。

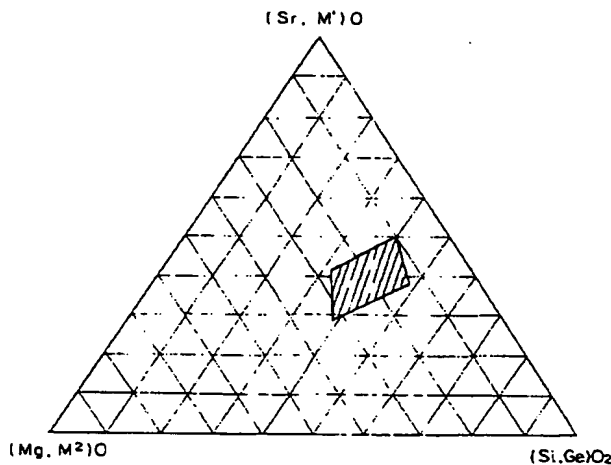
【図3】実施例1～3で合成された蓄光性蛍光体に対し、365nm紫外線で励起したときの発光スペクトルを示したグラフである。

【図4】実施例1の蓄光性蛍光体の各発光スペクトルピークにおける励起スペクトルを示したグラフである。

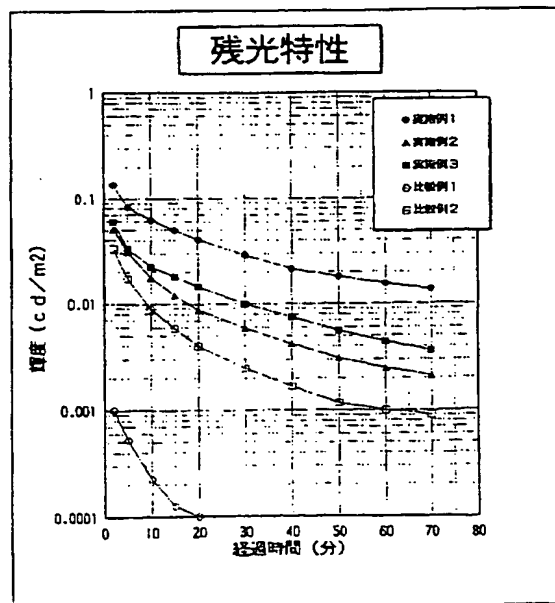
【図5】実施例1～3、及び、比較例1の青色～緑色発光蓄光性蛍光体と、比較例2の黄緑色発光蓄光性蛍光体の残光特性を比較したグラフである。

【図6】実施例1～3の蓄光性蛍光体の熱発光特性（グロークラブ）を示したグラフである。

【図1】

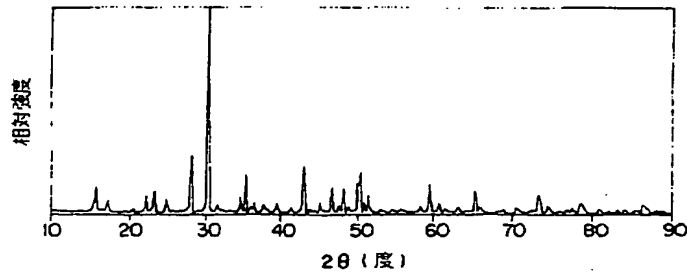


【図5】

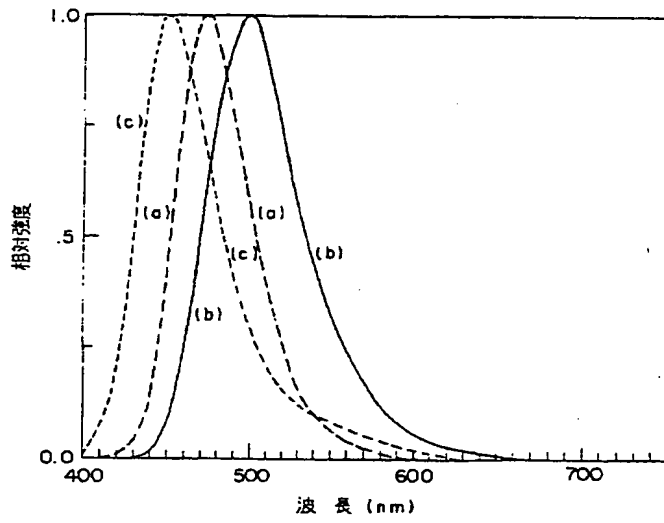




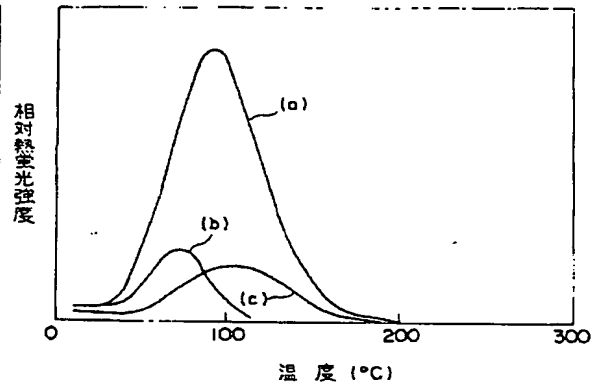
【図2】



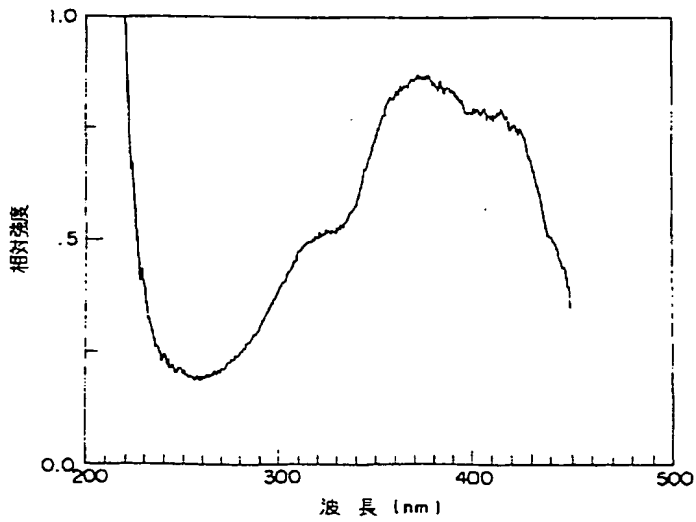
【図3】



【図6】



【図4】



フロントページの続き

(72)発明者 三浦 典夫  
神奈川県小田原市成田1060番地 化成オプ  
トニクス株式会社内

(72)発明者 坂本 轟  
神奈川県小田原市成田1060番地 化成オプ  
トニクス株式会社内